

Arb. 33: 31 (1952).

var. *megalocarpa* (Nakai) Kitagawa, stat. nov.

Actinidia megalocarpa Nakai in Rep. First Sci. Exped. Manch. 4: 1: 9 t. 3 (1934), l. c. 4: 4: 33 (1936); Kitagawa, l. c. 317 (1939). *Actinidia arguta* Planchon var. *arguta* Li, l. c. 32 (1952), ex parte.

Nom. Jap. Oomi-no-sarunasi

Area Geogr. Manshuria austr.

□R. E. Holtum: plant life in Malaya (pp. 354, figs. 50, Longmans, Green and Co. 1954) の紹介

著者はマレー大学教授、長くシンガポール植物園に勤務し、同地方において 30 年の研究歴をもっている。この著はマレーの住民、特に教師、大学初級の学生以下の人々にマレーの植物一般の知識を与えるのを目的としている由序文に見える。各章は意識すると、常緑のマレー、茎と根、竹と蘭、イモの類、栄養繁殖、花、果実と種子、バナナ、禾木、Pigeon orchid の話、着生シダ、地上生シダ、蔓植物、寄生植物と腐生植物、水生植物、蟻植物、マレーの森林で、術語が殆んど出て来ない文章なので非常に楽に読める。何か一寸突込が不足のように思われるが、これは大学初級以下の程度を厳重に守つたためであろう。別の見方をするとマレーに産する植物を材料にして植物学一般——特に生態、外部形態を説いているように見える。温帯に住む我々にはマレーのような湿润な熱帯地方の植物を概観するのに丁度手頃の書といえる。多数の挿入凸版図もきれいだ。全般にラン科、シダ類の記述が多いのも熱帯らしい。一二の例を挙げると、第一章、常緑のマレーでは開花、発芽のリズムと気候環境が説かれ、第二章、茎と根では、双子葉植物の代表にゴムノキ、単子葉植物の代表にヤシ、タコ、ドラセナを用いて記述している。第十五章水生植物では淡水産の *Marsilia*, *Pistia*, *Lemna*, *Utricularia*, *Ceratopteris*, *Scleria* などの他に、我々には物珍しいオジギソウに似た *Neptunia*, シトイモの類 *Cryptocoryne*, マングローブの類、海中の顕花植物 *Enhalus*, 海藻に及ぶ広い範囲を記述している。新版「熱帯植物奇観」といつた所。巻末に植物のマレー名と学名との対照表があるのも親切。(津山尚)